風景のある書架

坂口　雅樹*

書庫を歩くと

図書館の書庫を歩くと、おもしろいことに出会う。書架に並んでいるのが、まぎれもない本であるのに、それが本でないような気分になってしまう。通りすがりに「急がず休まず」などと書かれた背文字に出会うと、気にかかって後戻りして立ち止まってしまうこともある。つらつらとめくる手にゲーテの詩の一節が飛び込んでくると、ほとんど無関係に思えていた詩の世界が、体の中ですこしずつ広がっていく。「星のごとく、急がず、休まず、人みなおのれの持ち場を回れ！」まるで書庫の持ち場を離れるな、とでもいうような響きがある。真新しい本についつい気をとられてばかりいたせいか、くたびれはてた本をみると、いつになく人間らしくみえてせつない気持ちにもなる。喉もとにほころびが見え隠れした時などは、なおさらである。花ぎれが開いてしまった国史大系は、いつ繕いが始まるのかと待ちわびている。盛りを過ぎた花びらである。大日本古文書正倉院編年文書にいたっては背中に痛々しい傷跡がある。本の傷を癒すのは、職人芸である。こわし（分解)、繕い（補修)、綴じ（目引き・目打ち) 、見返し張りの順序で、合本・改装製本がすすんでいく光景は、今の図書館ではみられなくなった。たしか四半世紀前には、諸製本とよばれる図書館製本を見たような記憶があるが、夢の途中で出会った、一幕のまぼろしであったのかもしれない。ところでいまや、手先が器用な嘱託職員のＡ君でも、接着剤とテープを使って本の傷口の応急措置にあたるのが精一杯である。

*さかぐち・まさき／閲覧課

それでも彼の前に立つと、自分の不器用なこの手先が哀れで、すごすごと他の仕事に取りかかってしまう。外の業者から仕上がってきた本を吟味することが、蔵書係の仕事になっているが、でも良い時代にめぐり合わせたと、本当に言いきれるであろうか。

図書館員の誇り

本のことについて、あるいは図書館のことについて吟味してまとめられた本が並んでいる書架ほど、背文字が整然と並んでいる書架は他にない。図書分類でいえば総記にあたる書棚である。変な話であるが、蔵書係が蔵書の点検に入って、書架の乱れも紛失図書もなくてほっとする場所である。壮大な叢書類が、とりわけ和装本や古書が累々と軒を連ねているからでもある。たいへんな授かりものをしたものだ、と喜んでばかりもいられない。叢書類の利用は、書庫に降り立たなければなかなか要領をえない、という運命にある。端末検索ではおぼつかない資料群。他にもあるかもしれない。こういうものに対面しなければならないというのも、地味ではあるが図書館員の誇りといってもよい。

総記類の先頭に立って、今という時代でもゆるぎない地位を占めている一角がある。002の学問とは、という分類である。これは学問の原点であるばかりではなく、図書館の思想体系の出発点でもある。あってはならないことであるが、鉛筆の書き込みや下線がところどころにみられる一冊の図書がここにある。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず、といわれている。天が人を生じたときから、万人はみなおなじ地位・資格をもち生まれながら平等であるということだ。貴いとか、賤しいといった、身分上下の差別などない。」この“現代語で読む 学問のすすめ（福沢諭吉著　檜谷昭彦訳・解説　三笠書房）”に記された鉛筆の跡には、学問を志す若き人々の語るに尽くせない思いがあふれている。その気持ちを消しゴムで消し去る気にはならない。和綴じ本の「学問ノススメ」には染みのほか何もない。「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ人ノ下ニ人ヲ造ラズト云ヘリサレバ天ヨリ人ヲ生ズルニハ萬人皆同ジ位ニシテ生レナガラ貴賤上下ノ差別ナク … 」際立って硬質の、この総記類の書架は、一般の利用者を寄せ付け

ない。司書でもないかぎりなかなか入り込む余地がない場所といえる。だからあまりひとけのないような書架の本を利用して、このとおりの職業についていることが、ときおり場違いのような気がしてならない。いつだったか、司書資格を取ったと郷里の親に報告したという人の話をきいたことがある。そのかたの親はたいそう喜ばれたそうで、息子もやっと一人前の“司法書士”になったのかと理解されたそうである。教員免許状の話は別にして、司書資格についてはどういうわけだか、25年たった今でも故郷の人には話してはいない、という人もいる。

それはそうとして、図書館の身のまわりで、明治大学の校歌や芦田古地図文庫、西洋の古版本などを研究している人たちの姿をみると、地味ではあるが他の人にはみえない輝きがあるような気がして、なぜだかうれしくなる。司書だからであろうか、ことに古文書やギリシャ語、ラテン語の読み書きができる諸先輩、それに若い図書館員を身近にかいまみると、私まで偉くなったような錯覚を覚え、それが誤りであるとは知りつつもついつい仲間のような気になってしまう。ときおり、芦田の一枚一枚の地図を収納する袋、ほぼ1500枚に書名を入れているが、作業の工程で古い地名と出会うたびに、地図の研究グループとはまったく関係のない身の上なのに、見えない一本の糸で繋がっているような思い入れをなぜかしてしまうことがある。

故郷との出会い

図書館の利用者が図書館員に礼を言うのはそれほど珍しいことではない。しかしその逆の立場を経験したことがある。軽井沢町誌の閲覧を頻繁におこなう利用者がいたので、返本したあとでどんな内容の本なのかと興味を覚えてしげしげとめくってみると、何とはなしに抱いていた、地方誌という硬いイメージにはまったくあてはずれの新鮮な文章がいっぱい詰まっていた。その一節を引用すると、

> 軽井沢とは、さまざまな人々の、さまざまな夢や願いやイメージが具現化され、またそれが多重に蓄積された空間である。この町のもつ魅力とは、それは人々に、“日常”を一時でも

忘れさせ、逆に何かを期待させる空間だからであろう。それは未来への希望であり、願望であり、あるいは果てし無い夢なのかもしれない。*

私はこの本を利用してくれた人が誰なのか知らない。しかしこの偶然を大事にしたい。資料に目覚めさせてくれたからである。だから、蔵書の仕事にもこんなオアシスのようなひとときがあるのだよ、と誰かに言ってみたくもなる。軽井沢を書庫に置き換えてもう一度読んでみた。すると本物の書庫がみえてきた。軽井沢にまた行ってみたくなった。

そう思って、書庫の階段を上り詰めると、行き先はおのずと決まっていた。故郷の郷土史の書架である。佐渡両津の本は確かにありはした。軽井沢町誌のようなことを期待していたわけではなかったが、郷土の市誌をはじめて読む機会を得た。そして気になっていた人の記述はないかと探してみた。北一輝のことである。あるにはあったが、両津市誌下巻の別冊年表にたった一行、「昭和 11（1936）二・二六事件が起こり、関係者として湊出身の北一輝が翌年処刑された。」とある。松本健一著の “孤島コミューン論”（現代評論社昭和 47 年刊）では、北は囚われの身となったときに、官憲に佐渡について語ることをしなかったとあるが、北の心の中にはもはや佐渡のことはなかったのであろうか。両津市誌は官製の歴史、いわば正史であるから、たとえ罪人であったとしても北が郷土のためにつくした義民ならばともかく、国賊・北について記述することなど論外のことである。それにしても、なんとまあ北に関する図書が多いことか。書架に並んだ個人伝記、政治史、現代史の中に、北一輝研究書が散りばめられている情景を目にすると、北の精神史ともいうべき風景が忽然と現われてくる。帰郷の船上で流れるテロップに、郷土が輩出した著名人の一人、北の名前を見ると、それが誰に対して向けられたのものであるのか、誰も気にとめそうもない文字情報であっても、私には忘れ去ることのできない風景として心に残る。

*「軽井沢町誌 民俗編 第二章第三節 『軽井沢の魅力』 / 軽井沢町誌刊行委員会 1988 年刊 p.327 」より抜粋

手紙が育むもの

そうこうしているうちに、今度は大海に漕ぎ出す小船のごとき運命に出会った。フランス語の手紙を大意でよいから訳して欲しいというのである。みれば、ちょうど100年前、仏法学者・G.E.ボワソナード博士から外交官・杉村虎一氏に宛てた私信である。フランス語をちょっとかじったくらいでどうにかなるようなものでもない。はがきサイズでいえば四枚分にもなろうか、人のことは言えないが、はっきりしない筆記体である。とはいえ、現代でもフランス図書館員の通信文のほとんどがこのボワソナードさんと大差ないといえそうなので、なんとかなるかなと思ってじっくりと眺めてみた。しかし無学であった。翻訳の期日が迫っていたので、とりあえずその外堀を埋めることにして、手紙の説明書きをこんなふうにした。

> 1873年から1894年までの20年にわたる日本における法律専門家・指導者としての任務を全うし、ボワソナード博士は翌1895年3月に帰国した。パリ大学は名誉教授として遇したが、1896年にはパリを去り、南仏アンチブに隠棲した。1899年3月10日付けのこの手紙は、サンクト・ペテルブルグ在ロシア日本公使館一等書記官・杉村虎一氏に宛てた返書である。なお杉村氏は、後にメキシコ、スイス各特命全権公使を経て、在ドイツ大使館特命全権大使を歴任した。

手紙の宛名、日付や時候の挨拶ほどしか読みこなしていないのに、なんとか説明文らしき体裁だけは整えた。これも図書館員だからこそ書架のありように敏感に反応し，嗅覚で必要な資料を探し当てる。茶色に深深と変色して崩れかかった、かれこれ一世紀前の図書。明治34年印刷局刊「職員録（甲）」に杉村氏の職名が載っていた。在露国公使館一等書記官 三等一級 従五、勲五 杉村虎一。そしてこの図書の表紙には、かの毛利家旧蔵書の蔵書票が右下隅に貼付してあった。公爵毛利家文庫類別 諸家154。時代を遡る事象の糧に、この文庫がたびたび悠然と姿をあらわし、図書館員の士気を鼓舞してくれる。貴重な資料を嗅ぎ当てる力、歴史を透視する眼力を、この旧蔵書は今に語ってくれる。

書簡の中身に触れない、平板な説明であったが、図書館職員のＢ氏が若干の書き直しをして、ボワソナード博士の書簡の説明文とした。それはこうである。

> ボワソナード博士は一八七三年から二〇年にわたる日本での法律顧問としての任務を全うし、本学にも多大な貢献をされて、九五年三月に帰国した。パリ大学は名誉教授として遇したが、九六年には南仏アンチブに隠棲した。九九年三月一〇日付けのこの書簡は、在ロシア日本公使館一等書記官の杉村虎一への返書である。杉村は明治法律学校創立期の講師で、メキシコ特命全権公使、在ドイツ大使館特命全権大使などを歴任した。（図書館蔵）

そう、うかつであった。杉村氏と本学の関係に触れずに説明文としたのは浅薄であった。先輩に感謝したい。この書簡は、リバティータワーに開室した岸本辰雄記念ホールの一角に展示されている。願いはただひとつ。すべての書簡が翻訳されることを。

昔の旅に出かけた

コソボで泊まったことがある。旧ユーゴスラビア・コソボメトヒヤにマケドニアのスコピエからバスで行った。それがどちらの町なのかは定かではないが、セルビア人の聖都・ペチ行きの乗り継ぎでふらふらと立ち寄った、州都・プリシュティナのトルコ風喫茶店でのことであったと思う。モスレム服を着た白髪の彫りの深い男に声をかけられた。同席してもいいかと目で合図して、にこにこと座ったそのアルバニア人は、日本という国を知らない様子で、その日本とかいう国はインドネシアよりたいへん遠いのかと聞いてきた。「タモ ダレコ（遥か彼方）」と、数少ないセルビア語の単語を並べて答えてみた。そういえばインドネシアもイスラム圏である。ここでトルコ・コーヒーの苦味をはじめて味わって、寂しい一人旅はつづいた。地肌のみえる急峻な山岳地帯の細道をバスに揺られて辿り着いたペチは、それでも緑で覆われた清楚なたたずまいをした町であったが、林の

中の小さなあの宿、あの町、あの老人はもう消えたのであろうか。あれから25年の歳月がたってしまった。地雷で埋め尽くされた山道。新聞一面の写真で、防寒コートに身を包まれた幼子が、大きな瞳に涙をたたえてこちらを射るように見つめている情景に出くわすと、コソボがすぐそこにあるようで、胸が締め付けられる。それはつい今しがたまでのユーゴスラビアの内戦で、戦禍を逃れてドナウ川を渡る、ある少年の詩の一節を復唱させる。「僕が泣いたら、涙の重みで、舟が沈むかもしれない …」

図書館オリエンテーションでコソボにからめて情報の利用について話しをしたことがある。コソボという言葉に反応して、500人教室で頭がいっせいに教壇を向いた、と脇で補助業務をしていてくれた嘱託のかたが、帰りぎわに言った。後でユニセフがコソボ難民の救援募金をしていると知って、気にかかっていたことなのでちょと口にしてみた。となりにいた嘱託職員のC君が、募金はしましたよ、とさりげなく言った。なかなかできないことである。そこでここで終わらせてはいけないと思い、図書館の館内ゼミツアーでまたコソボを引き合いにだしてみた。東欧史専攻のグループ引率である。タイトル検索で「コソボ」と打ってみた。結果はゼロ件。これではなんとなく申し訳ないような気がしたので、「kosovo」にして再検索してみた。3件ではあったがうれしくなった。延々と図書整理を積み重ねてきた努力が報われた瞬間である。“East European monographs”といえば、洋図書整理業務を担当した職員で知らないものはいない、あの513タイトル、14棚にのぼる息のながいシリーズの中に、そのコソボはあった。しかし喜びもつかの間、ずっと前から気になっていた図書群はどうなっているのかと、すぐ近くの書架をのぞいてみた。“Forschungen zur deutschen Landeskunde” という、これも212タイトルからなる地理学のモノグラフ・シリーズである。案の定、未遡及である。標準的整理ができにくいという点で、機械可読目録時代から疎外された資料の一例である。カード目録でしか調べる手立てのない図書と、どのように付き合っていけばよいのであろうか。

探し物

オンライン目録が資料探索のあたかも唯一の手段であるかのように、検索結果がでたりでなかったりで、結論を急いではいけない。館内ゼミツアーを先導して、何度もなんどでも口を衝く言葉がある。一本の井戸を掘りつづけると、ときとして意外な鉱脈にぶつかることがある。書庫に深く潜り、隈なく歩き、本の匂いをかぎ、背を見、ページをめくる。その全ての行為に、知識というものを体の隅々まで行き渡らせる、見えない力、宝物を探し当てる力があるのだと。ある日、オンライン検索は一つの暗示にしかすぎない、と言って書庫の中を歩きまわる利用者を知る機会をえた。未知の資料を探し当てる苦労を、密かな喜びに変える術を、学生に教えているかたである。書庫に入ってはじめて、見えないものが見えたという体験をすると、なおさら書庫の中を宝物を求めて探し回りたくなる。そういうことを願っているのかもしれない。

書庫を歩くと、本が目に入るだけで、これを情報と意識することはない。本には形があり、色があり、それには匂いがある。筆者の思想ともいうべき香りが、書架に漂っている。だから、学術情報といったところで、それは書庫や書架という、本と人との架け橋とは別の、形のない世界のものとしか思えない。繰り返し耳にする学術情報。この言葉は1980年代半ばより、日本国中を嵐のように席捲している。文部省の学術情報センター（学情）がその目であろう。だが学情というものからは、水道局しか連想しない。貯水池あるいは地下水が図書館であり、水道局が学情、そこに水道管があって、そして水道水が学術情報と目録情報。であると表現したならば、あまりにも短絡的なものの捉え方であろうか。水道水は消毒され、加工が施された水である。だから時として手垢のついた原典を見ることなく、画面情報だけで満足することもある。これに振り回されて溺れないように、しっかりとした力を得てみたいと思う。

消えた女神

情報は、見たいとき、読みたいときにいつでも手軽に手に入るものではない。気がついたときには、もう画面から消えて他の情報に置きかえられていることもある。インターネットのホームページでのことである。2年前の体験とはこうである。明治大学図書館のホームページにこんな図書館紹介記事が、図版入りで掲載された。

「今からちょうど100年前の1897年、Paul Gauguinはタヒチ島旅行の折に、今に残る有名な絵を描いた。“D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous? （我らはどこより来たのか？我らは何なのか？我らはどこへ行くのか？）”という標題の絵である。Gauguinの絵筆の時代に問いかけた、“Où allons-nous?” から100年目の“未来”の今日、明治大学図書館は、1923年9月1日の大震災でわずかに残された、たった71冊の蔵書から再出発して、質量共に大図書館に成長しました。そしてさらなる未来に向けて、図書館は古い体質から脱皮しようとしております。保存中心・本学関係者中心の図書館から、貸出制度の拡充、社会人利用制度の充実へ、きたるべき21世紀に向けて図書館は着々とその準備を進めております。1963年8月、ワシントン大行進にて、Martin Luther King牧師は“I have a dream”で始まる、かの有名な言葉を残している。その一節はこうである。“私には夢がある。それは、いつの日か私の幼い四人の子どもたちが、彼らの肌の色によってではなく、人格の深さによって評価される国に住めるようになることである”と。そして我が明治大学図書館にも、夢があります。“どんな小規模な図書館であろうと、そこで学び、そこで研究の糧を得ている者たちが、彼らの蔵書量の差ではなく、学習・研究の熱意によって成果が上がるようになる国に住めるように、我ら明治大学図書館が一歩でも貢献できることを誇りに思う”と。我らのめざす開かれた図書館とは、実はこういうことなのです。」

この図書館紹介は、1997年の秋に掲載されて、翌年の春に消えた。1897年から数えて100年目の時刻に消えるべき運命にあったといえる。そしてここに挿絵を描いてくれた嘱託職員のDさんも今はいない。花園で、未来

に向けて夢をさしだしている女神像を残していってくれた人である。1998年の夏からは、図書館へのいざない文は、書架の風景入りのボーズル文庫に代わった。しかし英文ホームページでは、別の文章が用意された。消えたはずのゴーギャンが蘇った。復活の立役者は、図書館職員のＥ君である。引用しよう、

Introduction

It has been about 100 years since Paul Gauguin(1848-1903)'s well-known painting was produced during his stay in Tahiti in 1897. Its title is “D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous?” (Where are we from? What are we? Where are we going?). Starting from only 71 books which fortunately survived the Tokyo earthquake on Sep. 1st 1923, the Meiji University Library has grown to be one of the largest in quantity and has achieved a reputation as one of the highest in quality in Japan. From “Où allons-nous?” through this present time, and into the forthcoming century, we must break with the traditional nature of a library. For example, in addition to our students, we intend to allow ordinary people to use our library, and also to expand our lending-system.

On 28th Aug. 1963 at the Lincoln Memorial in Washington D.C., Martin Luther King(1929-1968) made a memorable speech, which is full of significance, beginning with the words, as you may know, “I have a dream...” We presumptuously quote one paragraph here.

“I have a dream that my four children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character...”

We also have a dream that every pursuer of knowledge will one day live in a nation where their results will not be influence by the amount of books in the library they at, but by their enthusiasm for research. We are proud of being able to make a great contribution to take a step toward this goal. We believe that is what an Open-Library is. And that is what we aim to be.

The Meiji University Library

書き出しのフレーズ、「今からちょうど100年前の1897年」を、「about 100 years 」に改めて、今という時間に間に合わせた。ただそれだけではない。図書館のもつ使命を敏感に感じ取り、世界に向けて発信できる紹介文はこれ以外にはない、と判断してくれた、いまだ若いこの図書館員の存在を、なにものにも代えがたい宝であると私は誇らしげに語りたい。そこで、身勝手な言葉遊びかもしれないが、明治大学図書館の歴史を、この絵画の標題に例えてみたくなった。関東大震災で生き残ったわずか71冊の図書が80年後の今、180万冊になろうとする復興の証しに、そして来世紀に向けてのさらなる飛躍の内なる標語として、このゴーギャンの標題が生きているのかもしれない、と。で、それがいったい何の価値があるのであろうか。現実とかけ離れた虹のたもとで、一脚の木橋の欄干に手をかけて、誰かがぽつんと取り残されている情景を想像することがある。それを確かめようと、書庫の最深部の書架に降りて、「ゴーギャンの手紙 ／ 東環樹訳編」という背文字の本にたどり着くと、未来への不安な感情が帰郷という想念に変容するほかは、何物も残らない。

憧憬をしたためて

この不確かな感情は、未来への憧憬をいかに表現しようとも癒されることはない。雑誌「明治」(The Quarterly Meiji) 第3号に、図書館の願望をしたためたこんな文章が載った。

「中央図書館—71からの出発—
71という数字は図書館にとって特別の意味があります。今から76年前の9月1日、関東大震災で灰塵に帰した蔵書6万冊あまりのうち、わずかに生き残った71冊を礎にして、図書館は再出発したからです。震災直後の図書寄贈数は8972冊、学生、校友、教職員、著者、会社など510人が明治大学図書館に救いの手をさしのべられました。全館で180万冊、中央図書館だけで120万冊になろうとする今の蔵書量に思いを馳せる時、私たちは、その数ではなく、どのような蔵書を構築して今日に至ったかを自らに問いただす努力を怠ってはならないのです。

中央図書館が誇るコレクションは、日本全国及び中国・韓国の地方史誌、古地図、ドイツ史、アフリカ文庫、社史・団体史、各国議会資料、書誌・書目、『南総里見八犬伝』をはじめとする読本・草紙等々のコレクション形成、あるいは毛利家や黒川家の旧蔵書、青蓮院文書、林達夫文庫、カール・ボーズル文庫と、例をあげれば枚挙に暇がありません。

颯爽と築き上げてきた汗の結晶を、私たちは書庫という知的な空間で垣間見ることができます。

3年ほど前のある日、中央図書館に青森から一人の研究者がはるばる訪ねてきました。長年探していたウェサリウスの『人体の構造について』という1543年刊行の貴重書の閲覧が目的でした。

当時の解剖学の世界では、人体解剖は卑しい行為であるとみなされており、大学教授が直接執刀することはありませんでした。しかし、イタリアのパドヴァ大学教授であるベルギー人Andreas Vesalius(1514 〜 65)は、古代・中世を貫いていた非実証的な精神を批判し、理髪外科師が行うというこれまでの慣行を破って自ら人体を解剖し、これを克明に記すという近代解剖学の基礎を築いたのです。この著作の第2巻では、解剖された人体の筋肉系が、パドヴァの町を背景に、まるで生きているかのように詳細に描かれています。しかも筆者の息づかいが、460年の時を越えて、今この眼前の利用者の耳元にとどくような幻覚さえも引き起こします。

1988年7月、図書館は図書館の将来構想ともいうべき将来計画をまとめました。手短にいえば、だれでも、いつでも、そしてどこででも必要な情報に接することができるというものです。そして、図書館のすべての所蔵データを学術情報センターのネットワークに登録し、公開しました。その結果、遠来の研究者に、思いもかけず国内でウェサリウスの稀覯書を閲覧するという夢をかなえさせたのです。

資料を揃え、蔵書を構築すること、最新のＡＶメディア機器を装備すること、電子化された機能的な図書館をつくること、こういうことが夢につながる道かもしれません。しかし、きたるべき新図書館の建設に腐心し、物を動かしているのはまぎれもなく人です。図書館は人を大切にし、研究意欲の漲る人材を絶え間なく育成しています。図書館サービスの向上は、館員の精神活動のありようで目に見えて左右されます。蔵書と対話がで

き、図書館システムの開発に心血を注ぎ、利用者と接することを誇りに思う館員を、数多く育てること。来る日も来る日も、“価値ある”資料に向き合えば、いつの日か価値の有無を見透す力がつくでしょう。中央図書館は本物だけがもつ力を、夢を常に追い求めています。これが明治大学図書館のルネッサンスなのです。」（図録略）

ルネッサンスに思う

明治大学図書館の姿を心をこめて表現しているにちがいはないのであるが、これがすべて本当の姿なのだと、確信をもっていえるかどうか、はなはだ心もとない気がする。この寄稿のもとになった、“ですます調” ではない原稿がここにある。

「71という数字には格別の思い入れがある。今から76年前の9月1日、関東大震災で灰塵に帰した本学蔵書6万冊あまりのうち、わずかに生き残ったこの蔵書数を礎にして、本学図書館の歴史は再出発した。震災後の図書寄贈の数、8972冊。学生、校友、教職員、著者、会社などから510人が明治大学図書館に救いの手をさしのべたという。180万冊, 中央図書館だけで120万冊になろうとする今の図書館の蔵書量に思いを馳せる時、我々は他の図書館がどうであれ、その数ではなく、どのような蔵書を構築してきて今日に至ったかを自らに問いただす努力を怠ってはならない。毛利家の旧蔵書を筆頭に、現代に至っては日本全国の地方史誌、あるいは社史・団体史の意欲的収集、それに芦田古地図コレクションの形成と、例をあげれば枚挙に暇がない。颯爽と築き上げてきたこの汗の結晶を、我々は書庫という知的な空間で垣間見ることができる。そこで感じる蔵書の個性化とその多様性は、いまにして思えば、図書館研究紀要 “図書の譜” の刊行でその骨組み、そして理念が明らかになったといえる。しかもこの紀要への投稿が、館員の図書館研究活動の軸となり、とくに若い図書館員の自己啓発の目標になっていることは、71冊の種が80年近い年月を経て今世紀最後の瞬間に花開いたともいえる。

中央図書館には貴重書庫がある。3年ほど前のある日、遠路はるばると

一人の研究者が尋ねてきた。ウェサリウスの『人体の構造について』という貴重書の閲覧が目的である。1543年刊のこの図書は、世界名著大事典でもとりあげられている。その解説を要約すると、当時の解剖学の世界では、人体解剖は卑しい行為であるとみなされており、大学教授が直接執刀することはなかった。しかし、イタリアのパドヴァ大学の教授であるベルギー人 Andreas Vesalius(1514-65) は、古代・中世を貫いていたこの非実証的な精神を批判して、理髪外科師が行なうというこれまでの慣行を破って自ら人体を解剖し、これを克明に記すという近代解剖学の基礎を築いた。この著作の第2巻では、解剖された人体の筋肉系が、パドヴァの町を背景に、まるで生きているかのように詳細に描かれている。そしてこのような解説を知るほどに、ウェサリウスの息づかいが、460年の時を越えて, 今この眼前の利用者の耳元にとどくような幻覚さえも引き起こす。しかもなににもまして得がたいのは、この秀作の研究が、図書館員の手によって解題という形に姿を変えて、ほどなく結実しようとしていることである。

1988年7月、本学図書館では図書館の将来構想ともいうべき将来計画をまとめた。手短にいえば、だれでも、いつでも、そしてどこででも必要な情報に接することができるというものである。これは夢のまた夢かもしれない。だが学術情報センターに登録した、明治大学図書館の所在情報が研究者の夢をかなえさせた。国内でウェサリウスの希書を閲覧できた。我々は夢を一つかなえたといえる。

資料を揃えて蔵書を構築すること、最新の AV メディア機器を装備すること、電子化された機能的な図書館をつくること。こういうことが夢につながる道であるかもしれない。しかし、きたるべき新図書館の建設に腐心し、物を動かしているのはまぎれもない人である。だから図書館は人を大切にし、研究意欲の漲る人材を絶え間なく育成している。図書館サービスの向上は、館員の精神生活のありようで目にみえて左右される。蔵書と対話ができ、図書館システムの開発に心血を注ぎ、利用者と接することを誇りに思う館員を多数育てること。来る日もくる日も “価値ある”資料に向き合えば、いつの日か価値の有無を見透す力がつくであろう。中央図書館は本物だけがもつ力を、夢を常に追い求めている。これが明治大学図書館のルネッサンスである。」

「人体の構造について」は、正しくは「人体の構造についての7つの書」が標題である。巻数表示はその意味で、第2巻ではなくて第2書と標記したほうがよいのかもしれないが、いずれにせよ1巻本が7つの章に区切られているだけである。ところで、ごく最近になって、ウェサリウスのこの貴重書を購入した図書館があらわれたと知った。その大学図書館は貴重書の膨大なコレクションで有名である。しかし私には参考係で経験した苦い記憶しかない。図書館間の相互協力制度にはなかなかのってこない図書館だからである。保存中心の図書館の宿命なのかもしれない。明治大学図書館がレファレンス・サービスを核にして、外に向かって伸びていく華であるならば、某図書館は何に例えたらよいであろうか。眠れる海の真珠かもしれない。しかしながらそうは思っても、貴重書の世界におけるこの図書館の存在は大きい。資料に対する図書館員の眼力の鋭さを指摘されれば、雑誌「明治」の行間で感じた“心もとなさ”を打ち消すことはできない。貴重書の解題だけを何遍あさったところで、本物の姿は見えてこない。ラテン語ができたら原典を読めるのに、と何年つぶやいてきたであろう。

封印された図書

32年前に田舎から東京にでてきて、やがてこの世界に入り、そしていくつかの大事を耳にしこの目でみたが、それらはすべて心にとどめておくことができないほどに、些細なことでしかなかった。それよりもいつも心の中から涌き出てきて、私を励ましてくれた出来事を忘れることはできない。それが小さな出来事であったにしろ、いやそれだからこそ、図書館で生きていくことに迷いを感じたはじめたときに、まるで涌き水のように心を潤し、新鮮な感覚で図書館に踏みとどまらせてくれた、青年の時に出会ったあの一件を思い出すことがある。それは、“ローランド・メリット・シレーヴス博士”という著者名との遭遇である。

彼の著作「教育の基礎たる哲学」が邦訳出版されたのは大正13年、そして明治大学図書館に寄贈されたのが、昭和5年3月。爾来20数年間というものは、著者シレーヴスの「教育の基礎たる哲学」は書名目録さえあれば、著者名は図書に記載されたとおりのカタカナ名で十分であった。と

ころが日本目録規則1952年版が登場すると、目録の世界に一大変革が起こった。その61条では「他国語形の名」と題して次の条文が載っている。「他国語形の文字又は綴りを使用している著者は原則としては母国語形の名をとる。（参照：他国語形の名）母国語形の名が不詳のときはそのままの形でとる。」簡単にいえば、外国人名はカナ標記では目録の基本、いわば家の柱はできないということである。明治大学図書館がこの日本目録規則を採用した時点で、整理係の仕事は決まった。閲覧用目録は分類目録と著者名目録（正確には著者名基本記入目録）で編成して、和図書と洋図書は混配である。したがって同一著者名は同じ綴りで標記することになる。そこから旧分類図書の目録凍結がはじまり、同時に新分類図書に分類変更されていった。ところがすべての旧分類図書が粛々と衣替えしていったわけではない。いま現在ですらその作業が引き継がれているように、新刊図書整理最優先という業務環境の中で、旧分類図書が古い殻を脱ぎ捨てて新しい顔を出す機会は少なくなった。新分類に切り替えないと利用者の前に姿をあらわすことができない。シレーヴスの著作も、扉を開ける合いかぎのないまま、いつまでも書庫に封印されていた。

託された鍵

和図書整理業務から洋図書整理業務に配置換えになってほどない、1976年頃のある日、係の責任者が一冊の和図書を手渡してこう言った。「和書係からこの著者標目の原綴りを調べて欲しいといわれているが、いまだに分からないので君に頼む」と。図書の標題紙には翻訳者名、市川一郎とだけあり、原著者名の標記はない。翻訳者がまるで自分の著作であるかのように堂々と自己主張していた時代である。こんなところにも翻訳というものを大事にしてきた日本の文化史の一面があった。中をめくると序の冒頭に、原書名と肩書き入りのカナ標記原著者名がのっていたが、米国ネブラスカ州立師範学校の教授だけでは、カタカナ語から引ける人名辞典はない。また、著者名の典拠になる米国議会図書館の全国書誌目録（LCNUC）は、著者名基本記入の目録であり、書名索引はついていない。したがって目録法からいえば、単数の著者であらわされた著作に対しては原綴りを推

定してページをめくるほかには手立てはない。LCNUC Pre-1956 imprintsには、ShirevesもShilevesも載っていないことがわかった。そもそもShirやShilではじまる人などみあたらない。洋図書目録係の先輩たちがどんなに苦労していたかが理解できた。1950年代の目録法一新より時を経て20余年。今も同じ穴に入り込んだ自分のような者がいる。仕事の合間にふと思い出しては調べてみてもまるでだめである。業務用書名カードケースの裏側で、ちょっとすれ違った睡魔の時間帯でも、夢の中でシレーヴスの名が消えることはなかった。しかし議会図書館の目録に絶対にのっているという確信と、これに辿りつこうという意地だけはその途中でもあったと思う。

ブイヤベースの思い出

シレーヴスのシがShi またはSiでないことはわかった。ではシレの2字を続けてアルファベットに置き換えたらどうであろう。もうこうなったらまるごとかかえてイメージする感覚的、そう感性の世界に入るしかない。語学力のない者が立ち向かえるのはこれしかないと思って、シとレの間で口の中に残る、イを省いてみた。母音を除いたシレはShreかShleである。Ｓｈｒｅｖｅｓ，Ｒｏｌｌａｎｄ　Ｍｅｒｒｉｔｔ：The Philosophical Basis of Educationは、LCNUC Pre-1956 imprints にあった。高鳴る鼓動を押さえながら責任者に報告すると、まるで自分のことのように喜んでくれた。そして気を静めると、フランス料理のブイヤベースをご馳走するからついて来いということになった。神田の洋食店旧ランチョンで土曜日の昼下がりに何人かの職員と一緒に会食をした。その時の笑顔は私の笑顔よりはるかに大きかった。額が大きくて髪がやや薄かったのでそう感じたのかもしれない。次はエスカルゴを狙っていたと書いたら、今ごろ天国で苦笑いをしているはずである。目録をとる愉しみ、そして書を司る者の誇りを教えてくれた人であった。